PERSONA　Thanato　The dark in rain

黒詠紅音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＰＥＲＳＯＮＡ　Ｔｈａｎａｔｏ　Ｔｈｅ　ｄａｒｋ　ｉｎ　ｒａｉｎ

【Ｎコード】
Ｎ０９８９Ｉ

【作者名】
黒詠紅音

【あらすじ】
九条ヶ原高校に転校する事になった主人公、紅音寺煉は平凡だった筈の学園の秘密を知ってしまい――――。完全オリジナルストーリーな気がしないでもないハートフルを目指してる確率が無い事も無いペルソナＦＦです、宜しくお願いしますだぜー♪（黙

LIMIT TIME I

真夜中の零時丁度。
屋上に来てごらん。
夢を叶えたいんだろ？
なら来てごらん。
大丈夫、怖くない。
全てを掴む覚悟で来てごらん。
だから、来てごらん。

◆

相変わらずの曇り空。
財布から切符を取り出し改札口を通り抜ける、騒々しい周囲の人々に流されぬ様に出口へと進んでいく。
さぁ、始まるよ。
誰かの声が聞こえた気がして振り返る。
俺と同じ様に出口を目指した人の波があるだけだった。
さぁ、始めよう。

声が聞こえた、でも振り返らなかった。
そして、終わらせよう、全てを。
硝子の様なその声は俺の耳に良く響いて、少し切なかった。
それでしか、世界は変えられないのだから。
それはまるで遠い日の彼女の声にも聞こえて、俺は泣きそうになった。
とりあえず目的地を目指そう。
話はそれからだ。

◇

駅前を抜けていくと旧九条ヶ原商店街に到着した。
いや、正確には到着してしまった。
「あれ……、迷った？」
そう思った瞬間背負っていたリュックサックが地味に重く感じた。
どうやら本気で迷ってしまったらしい。
しかも商店街は殆どがシャッターが閉められ人は誰も居ない。旧九条ヶ原商店街は去年南の方に新しい商店街（主に大手デパートなどが主催）が設立され此方の商店街に客が来なくなり寂れていったらしい。
（大変だな、どこも）
地元でもそう言う事があった、個人経営の店が大型デパート……確かジュネスによって経営破綻したとか聞いた事がある。これもその様な類だろうか。
「って、問題はそれじゃないんだよなー」
携帯のＧＰＳを頼りに進むという手もあるのだが正直更に迷いそう

な気がする。
しかも人も居ない状況で誰を頼れというのか。
念の為携帯から地図を検索してみよう、と携帯を開いた直後。
後ろから、シャ――――、と聞き覚えのある音が聞こえる、多分自転車の音だろう。振り向くと
携帯画面に集中して目の前を見てない女子高生が乗った自転車が俺に突っ込んでくる直前だった。

「え？」
多分俺は今引きつった顔を浮かべているような気がする。
相手はようやく俺に気づいたのか慌てた様子で。
「ちょっ！？　え？　止まれって言うか避けてぇ――――！」
が、既に遅し、自転車と正面衝突した俺はゴロゴロとタイルの上を転がった。
直後の俺の感想『無茶を言うな阿呆』。

◆

タイルを転がって体の所々に痛みが走る、が立てないほどでもなかった、手を使ってフラフラと立ち上がる。
「痛ー……」
溜息をついて女子高生を探す、怒る為ではない、正面衝突したなら彼女の方も怪我してるかもしれない。
が、俺は次の瞬間、衝撃の光景を目撃する。
少女は普通に自転車に跨ったまま此方を見つめていた、若干憤怒の色を見せて。
声をかけにくいと言うか言葉を慎重に選ばなければいけない状況だった、此処は何とか交渉をしよう、そうしよう。
「あのー……」

「アンタ、バカじゃないの？」
はい、交渉失敗、また来週。
女子高生は自転車から降りてズカズカと此方まで近づいてくると俺の事を指差して怒鳴る。
「普通アレは避けるでしょうよ！　私が怪我したらどうするつもりよっ！」
「自分勝手すぎるわ！」
思わず条件反射で返してしまった、相手はポカンとした顔を一瞬だけ浮かべるが直ぐに憤怒の色に戻る。
「自分勝手とかそういう問題じゃないでしょ！　つか叫んでるんだから避けなさいよー！」
ぁ、何かキレそう。
「携帯イジって前方不注意の女にそんなの言う資格は無ぇよっ！」
俺の言葉に相手は何も言い返せないようだった。
そして俺は少女の事を始めて見た、焦っていたせいで良く見てはいなかったからだ。
肩までの長さのオレンジ色の髪、緋色の瞳に卵型の顔、サマーセーター着こなしプリッツスカートが似合う少女はかなりの美形だった。
状況が状況でなければ素直に可愛いと思っていたかもしれない。いや今でも十分可愛いが。
「何よ？」
俺の視線に気づいたのか少女が訝しげな表情で見てきた、俺は慌てて視線を逸らす。
少女は無造作に自転車に跨るとフンと鼻を鳴らして俺を見る。
「アンタ、名前は？」
「は？」
「名前よ、見た所私と同じ九条ヶ《が》原高校に通ってみるみたいだけど見ない顔みたいだし」
俺は彼女のサマーセーターの胸元にある刺繍を見た、紅い湾曲した模様、九条ヶ原高校の校章だった。

「……李音」
「は？」
少女が聞き返してきたので俺は再び自分の名前を告げる。
「紅音寺煉（くおんじれん）……明日からその高校に転校する事になってる」
一息間を空けて少女は口を開いた。
「紅音寺……煉ね、気が向いたら覚えてあげるよ」
偉そうにふんぞり返って少女は自転車に乗った、俺は慌てて呼び止める。
「ってちょっと待て、お前名前は！？」
ぁん？　と不機嫌そうに少女が俺を凝視する。
「学園で会ったら教えてあげよう、転校生君」

そう言って名も知れぬ彼女は颯爽と商店街を通り抜けてしまった。
「……嵐みたいな奴だな」
俺は苦笑を浮かべて制服の土ぼこりを払った。

◆

俺は十五歳、今年で中学三年生になる。
親の仕事の都合で九条ヶ原高校に転校する事になってしまった。
元々そこまで思い入れの無かったので転校する時はそこまで悔やむものでもなかったが流石に道に迷えばこう思うだろう。
「転校するんじゃなかったなー」
思わず言葉に出してしまった、乙としか言いようが無い。
携帯サイトの地図を頼りに進んでみるも更に迷っている可能性がある。
溜息をついて空を見上げる。
鉛色の空と鮮やかな桜はあまりマッチしていないように見えたが良く見ると中々映える。

「……ハァ……」

再び溜息、親戚の家まで道のりは遠いらしい。

ＬＩＭＩＴ　ＴＩＭＥ　Ｉ（後書き）

ペルソナ４しか遊んでいないくせにペルソナのファンフィクションを書く、これほどの暴挙がありえるのだろうか、神よ。
はいどうもｗ紅音です。
契約のラヴェリタからの人はどーも、ＰＥＣの方もどうもです。
無謀にもペルソナを書いてしまいましたｗ

とりあえず言うと気づいている人もいると思いますがＰ４と年代的には同じです↑
ジュネス出てますしｗ

と、言うわけでＰＴＤＲを宜しくお願いします↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0989i/

PERSONA　Thanato　The dark in rain

2010年10月13日19時44分発行